

## 1 久邇子

芝を刈った。六月の終わりのむし暑い日だった。夏が好きではない。特に、太陽が照りつける暑さではなく、どんよりと曇った、夏の日が嫌いなのだ。

表に出る気もおこらず、家にも何ひとつ身が入らない。本を読んでいると、活字の上を目がすべっていくのがわかる。内容はまったく入ってこない。

庭は、二十坪しかない小さなものだ。ツツジと、細い櫟が、端の方に植わっている。あとはコウライシバで、それが野放図にのびていた。この季節が芝刈りにふさわしい時期なのかどうか、いったい年にどれほど手間をかけてやればよいのか、私は知らない。ただ、ひと月ほど前から、ベランダ側のコンクリートの敷石に、のびすぎた髪が襟足にかかるように、芝がかぶっているのに気づいていた。

小さな二階家の、一階の隅には道具部屋がある。亡くなった父親が、庭の手入れをする品を几帳面にしまいこんでいた。そこに、電動式のバリカンのような芝刈機があった。

肥料もろくにやらないのに、芝はのびている。もつとたくましいのは、雑草だ。ところどころ、芝生をおしのけるように、クローバーが繁り、花を咲かせている。クローバーの晴れた日に芝を刈ると、その花も切りとってしまうことになる。曇った日は、不思議に花を見ない。

活字にもめりこめず、届いたモックアップモデルを検討する気にもなれなかった。もう少し叩きあげておかなければ、今度の技術者会議で、シャッターブロックのエンジニア、田崎にねちねちとからまれることはわかっていた。田崎は、エンジンニアの典型で、デザイナーの価値をほとんど認めていない。

コンパクトタイプのプロ用カメラの開発にヤノ光学がふみきったとき、最後まで反対したのも、シャッターブロックのチーフエンジニア、田崎だった。プロフェッショナルリズムと、コンパクトは、相容れないというのが田崎の考えだった。ましてや、その企画をたてたのが、私であるとなれば尚更だ。彼にとつて、工業デザインとは素顔美人に厚化粧を施すことで、ときには目や鼻までをも塗りつぶしかねない変質者がそのデザイナーである。

ともあれ、曇った日は、クローバーが花を咲かせない。芝刈りにはびつたりの日というわけだ。

道具部屋のコンセントに延長コードをさしこみ、星型の回転刃が先についた、大型懐中電灯に似た芝刈機を作動させた。片手で握りやすい形になってはいるのだが、結構重たく、二十分もつづけていると腕がくたびれてくる。

回転する刃は、ほとんど抵抗なく芝の先端を切りとばしていく。チェーンソウの子供と  
いったところだ。唸り声までが似ている。

無作為に刈っていったのではきりがいい。大雑把に、庭を三分分し、左端のブロックか  
ら、刈っていくことにした。ひとつのブロックをていねいに仕上げると、三十分近くかか  
る。

中央のブロックの半ばまで進んだところで、薄陽がさしてきた。Tシャツの背が、にじ  
んだ汗ではりついている。握りのつけねについているスイッチで、刃の回転を止め、Tシ  
ャツを脱いだ。

小さな蛇が、濡れた胸にとまり、Tシャツで拭いた。庭の隅に、水撒き用の水道がある。  
今は、ガレージまでのびるホースがついているが、全ブロックを刈り終えたら、それで水  
を浴びようと思った。

最後のブロックを半ばまで刈ったとき、屋内でインタフォンが鳴っていることに気づい  
た。芝刈機を止め、裸足の裏を払って、中に入った。

インタフォンは、中央の仕事部屋、製函盤の裏側の壁についている。

「はー」

「須田です」

久邇子だった。

「今日から先生が旅行に出かけたので、半どんになったんです。近くを通ったら、車があ

ったから。迷惑でした？」

「いや、そんなことはない。鍵はかかっていないから、上がってくるというい」

「すみません」

一瞬迷い、庭に戻ってつづきを仕上げてしまうことにした。久邇子は一度、食事を作り  
に来てくれたことがある。二週間前、私がひどい風邪をひきこんだときだ。家の勝手は、  
もうわかってる。

脱いだTシャツも気になったが、そのままにしておくことにした。知りあってひと月、キス  
まではした。そろそろだな、と考えている。

詳しくは聞いていないが、二十の頃に一度結婚していた筈だ。男の裸を見て、逃げ出す  
こともないだろう。

「あら」

振り返った。ペランダに立ち、少しだけ目を細めて、私を見ている。形のいい瓜実顔だ。  
最初に会ったとき、きれいな形をしていますね、といい、笑われた。

欠点といえば、額からは筋が通っている鼻が、先端のところその鋭角的な線を失って  
いることだ。

犬みたいな鼻でしょ、そういえば犬歯も発達しているのよ——八重歯を見せた。

口元に品がある。それも顔の形が良いせいだ。目は申し分ない。いつでも涼しそうで、  
わずかに冷たさを感じさせるが、鼻の愛敬が救っているのだ。

薄いオレンジのブラウスに、白い麻のようなタイトスカートをはいている。背は高い。百六十三センチと聞いた。ヒールのあるパンプスをはくと、ほぼ私と並ぶ。

「どっちに驚いたんだい。この肉体美か、勤労精神か」

素早い微笑、と私は名づけている。口元にさつと浮かび、消える。嫌味がない。それをよぎらせて、久邇子は答えた。

「もちろん、あとの方。でも前者も、そんなに悪くないみたい」

「あとで、君のヘアデザインをこれにしてやる」

大袈裟おおげさに芝刈機を振ってみせた。久邇子は首をすくめた。きれいな髪をしている。肩までの長さで、ほとんど直毛に近い。非常に近い未来、その髪に触れてみようと思っている。

「終わるまで待っていてもらえるかな」

「つづけて。手伝うことあります？」

私は下を向いたまま首を振った。はねとんだ緑の切れはしが、胸や腹に貼りついた。

濃い緑色は、曇った夏空と同じで、私の嫌いなものだ。見つめていると、気が沈みこんでいく。耳が、そこに聞こえない音までもとらえてしまう。

間のびした銃声。シャツに広がる血の染みを、信じられぬように見つめた目、遠い夏だ。

私は左手で胸をこすり、考えを押しやった。ここではないし、今でもない。

しゃがんだ姿勢から、膝ひざをついた。体をのぼして、芝刈りをつづける。

「この続きは、書籍でお楽しみください。」

◎注意

本作品の全部または一部を無断で複製、転載、改竄、公衆送信すること、および有償無償に拘らず、本データを第三者に譲渡することを禁じます。

個人利用の目的以外での複製等の違法行為、もしくは第三者へ譲渡をしますと著作権法、その他関連法によって処罰されます。